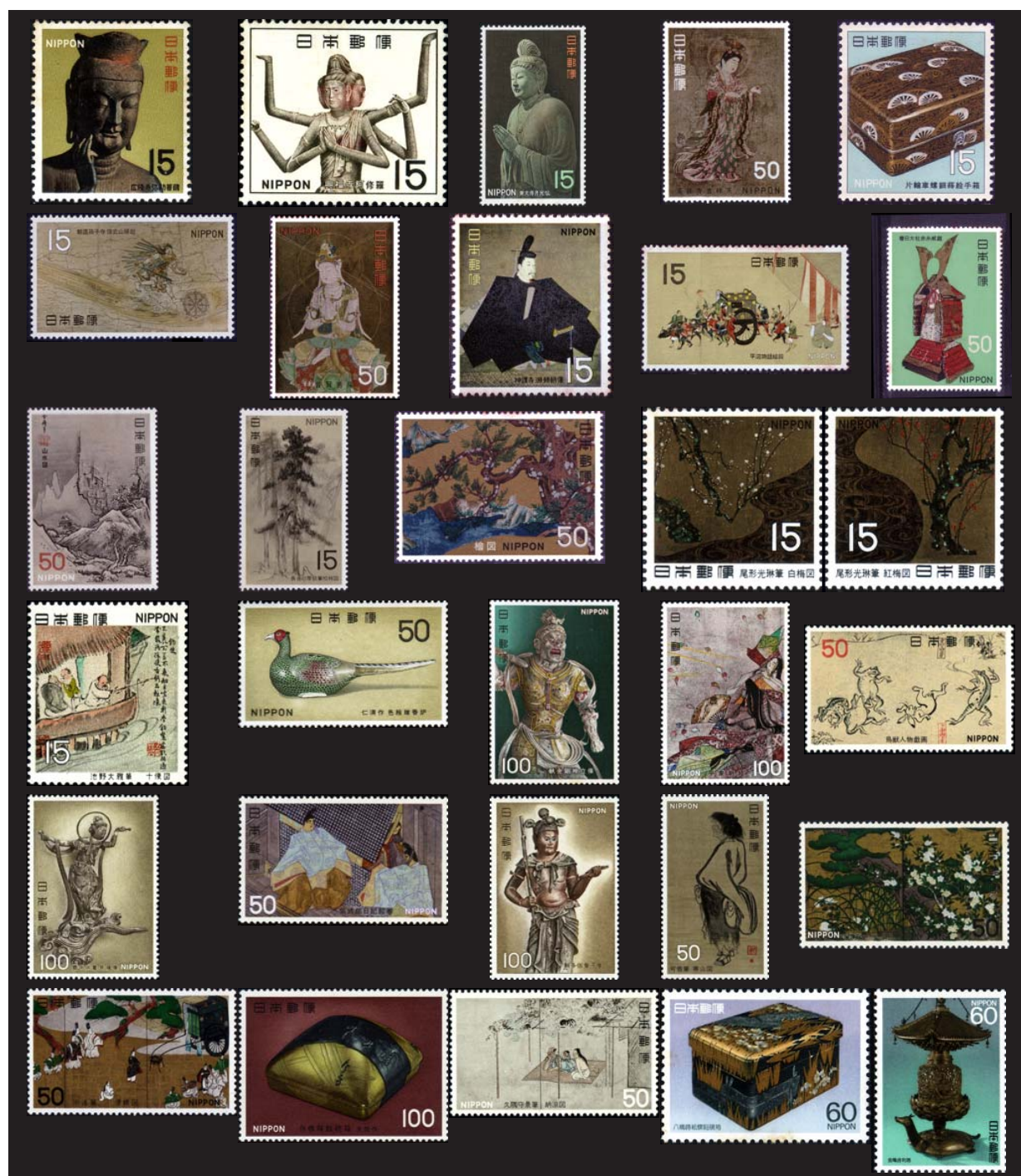


2024 年カレンダー

切手に文化財をみる



多くの文化財が切手に描かれています。国宝だけでも 300 以上が切手になっています。文化財の切手を取り上げカレンダーを作ってみました。

切手からいろいろと学ぶことを知っていただけたらとおもい、ネットから資料を得て作成しました。言わば、切手パクリカレンダーといった感のものです。



月次風俗図屏風

つきなみふうぞくず

八曲一隻 室町時代・16世紀紙本着色

総寸 縦114 横301cm 東京国立博物館蔵

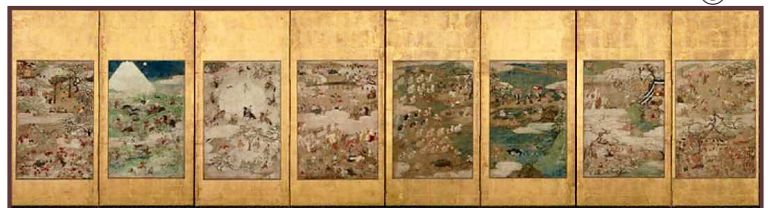
公家や武家、そして庶民にいたる様々な階層の風俗を描く。右端には旧暦正月の羽根つきや毬打（だきゅう）、二番目の画面には三月の花見、左端には十二月の雪遊びなどが見える。季節や月ごとの行事を描く、伝統的なやまと絵画題である月次絵*つきなみえ*の形式を継承したもの。平安時代に盛行した大和絵の古典的ジャンルである月次絵の伝統をひくものであるが、人物の労働や遊樂の有様に強い関心が注がれ、近世初期風俗画の成立につながる傾向を感じさせる。



国際文通週間切手
月次風俗図屏風
1995年発行

2024 年

1 月



日	月	火	水	木	金	土
	1	2	3	4	5	6
7	8	9	10	11	12	13
14	15	16	17	18	19	20
21	22	23	24	25	26	27
28	29	30	31			



浮世絵 蒲原 安藤広重作 浮世絵 江戸時代
東海道五十三次 蒲原



1960年発行
国際文通週間切手

広重は天保3年(1832)に幕府が毎年8月朔日に行う朝廷への御馬献上の一行に加わり、東海道を江戸から京まで旅をした。その時に見た風景や各宿の印象をもとに発行したのがこの「東海道五拾三次」といわれている。保永堂という版元から出されていることから保永堂版東海道とも呼ばれる。旅に関わる風物、人物を自然の景観のなかに叙情豊かに描き、広重の出世作となった。また、西洋の遠近画法を修め深い空間表現を創出した北斎の「富嶽三十六景」と並んで、浮世絵界に風景表現という新しい風を送り込んだ金字塔的作品ともいわれている。(『廣重 東海道五拾三次』静岡県立美術館)

2024 年
2 月

日	月	火	水	木	金	土
				1	2	3
4	5	6	7	8	9	10
11	12	13	14	15	16	17
18	19	20	21	22	23	24
25	26	27	28	29		



花下遊楽図屏風



1962年切手趣味週間切手



狩野長信 六曲一双 148cm × 355cm
17世紀江戸 東京国立博物館蔵 国宝

安土桃山時代の終わりから江戸時代のはじめ頃、
今から400年ほど前のお花見を描いた屏風。大きな
幔幕が張り巡らされるなか、春の宴が繰り広げ
られています。右の屏風では、満開の八重桜の下、
女性たちが車座になってご馳走を広げています。
三味線に手拍子も加わって、明るい歌声まで聞こ
えてきそう。

2024 年
3 月

日	月	火	水	木	金	土
					1	2
3	4	5	6	7	8	9
10	11	12	13	14	15	16
17	18	19	20	21	22	23
24	25	26	27	28	29	30
31						



色絵藤花文茶壺



1981 年発行
普通切手

野々村仁清作 江戸時代
寸法 高 28.8cm 口径 10.1cm 底径 10.5cm
底に「仁清」の大字印を捺す
MOA 美術館蔵 国宝

ふっくらと張った胴に、口は僅かに外に巻、低い頸がこれを支える。肩に耳を四つ貼り付ける。平底。口部から胴裾にかけて細かく貫入の生じた独特の白濁釉をかけ、柔らかみのある釉調を出す。赤、緑、紫、銀、金などを用いて、藤花を描く。葉には、針描きで葉脈を表す。

2024 年
4月

日	月	火	水	木	金	土
	1	2	3	4	5	6
7	8	9	10	11	12	13
14	15	16	17	18	19	20
21	22	23	24	25	26	27
28	29	30				



八橋蒔絵螺鈿硯箱



1955 年発行 普通切手



1987 年発行 国宝シリーズ

尾形光琳作 蒔絵・螺鈿 江戸時代
東京国立博物館蔵 国宝

二段重ねで上を硯入れ、下を料紙入れとした硯箱で、表面及び側面に八橋とそこに咲き乱れる燕子花【かきつばた】の景觀を現わす。黒漆の塗立の地に橋を鉛、杭を銀、花を螺鈿、茎と葉は金平蒔絵で描き、内部も黒漆の地に金平蒔絵で、いわゆる光琳波を力強く描く。尾形光琳（1658－1716）得意の燕子花図の意匠を用いて蒔絵硯箱にまとめ上げたものである。

2024 年
5 月

日	月	火	水	木	金	土
			1	2	3	4
5	6	7	8	9	10	11
12	13	14	15	16	17	18
19	20	21	22	23	24	25
26	27	28	29	30	31	



1969年発行
第1次国宝シリーズ切手

松林図屏風

長谷川等伯筆 6曲1双 紙本墨画 各156×356cm
安土桃山時代 東京国立博物館蔵 国宝

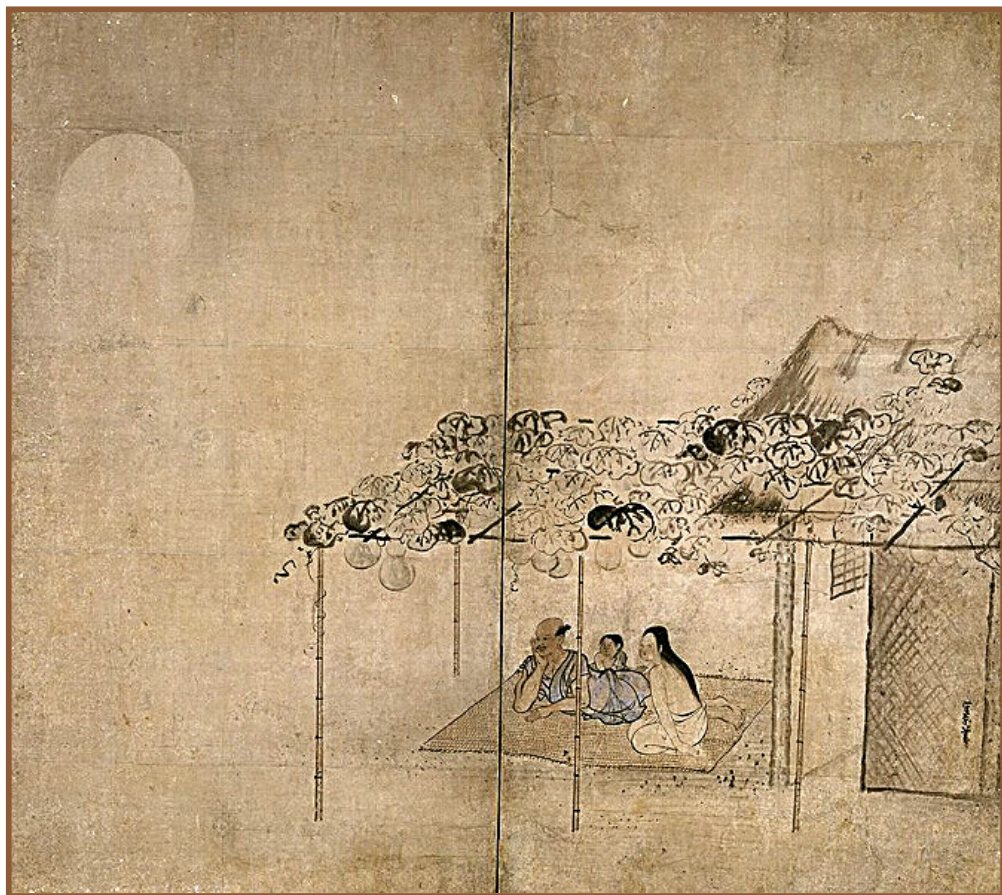


長谷川等伯（1539-1610）は桃山時代の画壇で活躍し、墨の濃淡や光の効果的表現を追求した。これは等伯の代表作で近世水墨画の傑作である。画面全体に霧が立ちこめ、左隻の松林は右端の雪山まで奥深く続き、右隻では向かい合った林がたがいに傾いて地面の起伏を暗示する。松葉や地塗りの筆致は荒い。ひんやりとした霧の中を歩いていると黒い影が現れ、松林に囲まれていて、かすかに山の頂が望まれる。一瞬の体験を永遠にとどめたような、静まり返った光景は、わびの境地ともいえる世界である。

2024 年

6 月

日	月	火	水	木	金	土
						1
2	3	4	5	6	7	8
9	10	11	12	13	14	15
16	17	18	19	20	21	22
23	24	25	26	27	28	29
30						



1978年発行
第2次国宝シリーズ切手

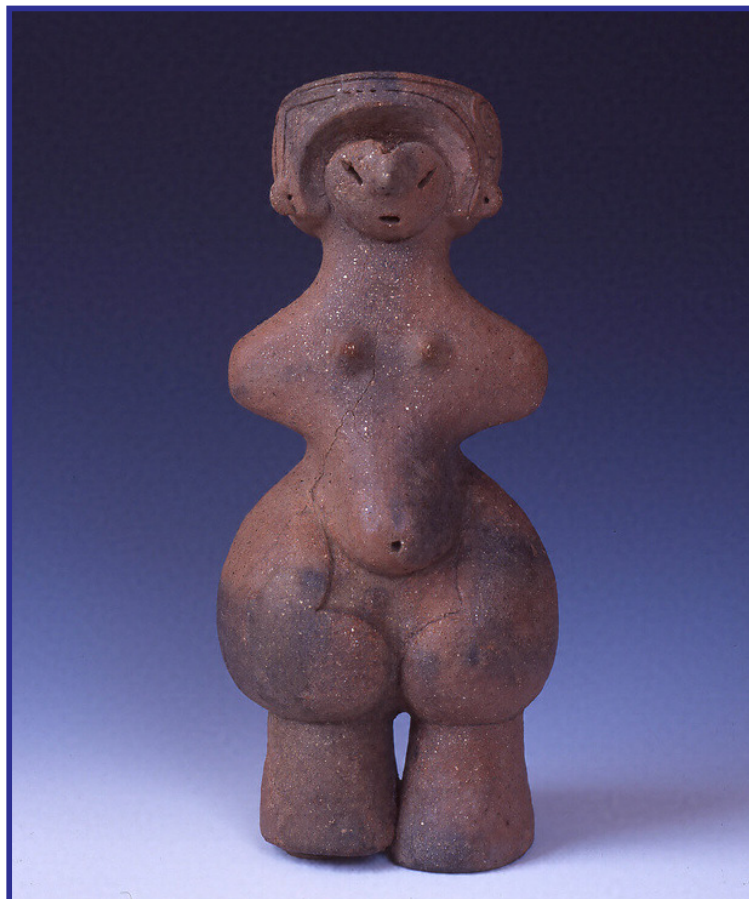
棚納涼図屏風

久隅守景筆 2曲1隻 紙本墨画淡彩
149 × 165cm 江戸時代・17世紀
東京国立博物館蔵 国宝

晩夏の夕べ、粗末な小屋の傍らに竹で組まれた棚には瓢箪の実が下がり、簟を敷いて三人の家族が涼みながら無言で白い満月を見つめている。おぼろな月の周りは暗く、間もなく夜のとぼりが落ちてくることを知らせている。近くに小川の流れがあるのか、砂利が細かく描かれて一筋の涼風も感じさせる。三人の身なりは貧しいが、寝そべる男は武士の気概を感じさせるような凛とした表情である。

2024 年
7 月

日	月	火	水	木	金	土
	1	2	3	4	5	6
7	8	9	10	11	12	13
14	15	16	17	18	19	20
21	22	23	24	25	26	27
28	29	30	31			



縄文のビーナス

長野県茅野市棚畑遺跡出土
縄文時代中期（約 5000 年前）
高さ 27cm・重さ 2.1kg
茅野市尖石縄文考古館保管 国宝



1998 年発行
ふるさと切手

妊婦を象っており粘土に細かい雲母片が練りこまれているために、肌がうっすらと輝いているように見える。雲母片が練りこまれた土偶も例が少なく、ほかの土偶が体の一部を破壊されているものが大半であるのに対し、この縄文のビーナスはほぼ完全な形で見つかったことも珍しい。「土偶」の名称で国宝に指定されている。

2024 年
8 月

日	月	火	水	木	金	土
				1	2	3
4	5	6	7	8	9	10
11	12	13	14	15	16	17
18	19	20	21	22	23	24
25	26	27	28	29	30	31



1970年発行 万博記念切手

夏秋草図屏風

酒井抱一筆 2曲1隻
164cm × 181cm 江戸時代 19世紀
東京国立博物館蔵 重要文化財



葛や藤袴、ススキや野葡萄といった秋の草花が右から左へと大きく風に吹かれています。宙に舞う野葡萄や、裏返った葉の色に、風の強さがしめされています。

夏秋草図はもともとは光琳の風神雷神図の裏にありました。つまり、この夏草は雷神がもたらした雨に打たれており、秋草は風神が巻き起こした風に吹かれているという関係にあったのです。

他にも光琳の「風神雷神図屏風」と抱一の「夏秋草図屏風」には、金と銀、天上の世界と地上の世界といった対比が見られ、光琳に憧れた抱一が、さまざまに光琳の作品に応えようとしたことがうかがえます。

2024 年
9 月

日	月	火	水	木	金	土
1	2	3	4	5	6	7
8	9	10	11	12	13	14
15	16	17	18	19	20	21
22	23	24	25	26	27	28
29	30					



春日山蒔絵硯箱

木胎漆塗 高 4.9 奥行 23.9 幅 20.1cm
根津美術館蔵 重要文化財

足利義政遺愛の硯箱のひとつとして名高い作品である。被蓋造（かぶせぶたづく）りの硯箱を梨子地（なしじ）とし、蓋表に女郎花（おみなえし）や桔梗（ききょう）、薄、等が生い茂り、三頭の鹿が佇む秋の野が満月に皓々（こうこう）と照らし出されている様を金研出（きんとぎだし）蒔絵と高蒔絵であらわしている。蓋裏には山中の茅屋（ぼうおく）で鹿の声に耳を傾けているかのような男が描かれている。文様の中に「盤（は）」「こ・と・尔（に）」「け」「連（れ）」の文字が草手（あしで）の手法であらわされ、『古今和歌集（こきんわかしゅう）』巻4、壬生（みぶの）忠岑（ただみね）の歌「山里は秋こそことにわひしけれ 鹿の鳴く音に目をさましつ」を暗示している。高度な文学的趣向を凝らした作品である。

2024 年
10月

日	月	火	水	木	金	土
		1	2	3	4	5
6	7	8	9	10	11	12
13	14	15	16	17	18	19
20	21	22	23	24	25	26
27	28	29	30	31		



1969年発行
国宝シリーズ切手

雪舟作 16世紀後半室町時代
東京国立博物館所蔵 国宝

秋冬山水図

2024 年
11月

「夏冬山水」として京都の曼殊院（まんじゅいん）に伝来した「冬景山水図」。四季山水図4幅対のうちの2幅とも考えられる。両図の安定感のある構図や力強い筆致は、雪舟独特の作風を示している。「冬景」では、雪におおわれた断崖が中央にそびえ、舟から降りた人物が楼閣に向かって歩んでいる。オーバーハングする断崖の力強い輪郭線、冬枯れの樹木がきびしい寒さを感じさせる。画面左下すみから、反時計回りに岩や山を螺旋状に配置する構図は、人為的な構築性を強く感じさせる。強い筆墨の調子とあいまって、画面空間には意図的に奥行きが排されている。

日	月	火	水	木	金	土
					1	2
3	4	5	6	7	8	9
10	11	12	13	14	15	16
17	18	19	20	21	22	23
24	25	26	27	28	29	30



金亀舍利塔



1987年発行
国宝シリーズ切手

南北朝時代（14世紀）工芸品
（舍利壺）肩高 4.5cm 胴径 11.2cm
（花網）約長径 27.9cm
（舍利塔）総高 93.0cm
唐招提寺 国宝

2024 年
12 月

国宝 金亀舍利塔は 鑑真和上の渡海中、海に沈んだ舍利を亀が背にして浮かび上がったとの故事にちなんで造られたものです。総体が金銅の打物、亀形部は木胎に金銅板を被せている。軸部は蓮華唐草の透かし彫り。和上の渡海中、海に沈んだ舍利を亀が背にして浮かび上がったとの寺伝にちなんで造られた。3つの部品で構成されています。まずは、舍利を納めてある①白瑠璃舍利壺（はくるとりしゃりこ）。それを包んでいた②方円彩糸花網（ほうえんさいしかもう）、さらにそれを納めている③金亀舍利塔です。③金亀舍利塔の胴体部分の、唐草紋の透かし掘りの中に、①白瑠璃舍利壺があるのがしっかりわかりますし、中の舍利も見えます。

日	月	火	水	木	金	土
1	2	3	4	5	6	7
8	9	10	11	12	13	14
15	16	17	18	19	20	21
22	23	24	25	26	27	28
29	30	31				